

遠藤周作『海と毒薬』論

——三つの〈死〉をめぐる——

大塩 香 織

はじめに

遠藤周作は自らが戦中派であることをエッセイや作品の中で度々主張した作家である。昭和三一（一九五六）年、遠藤は〈戦争責任〉を〈重大な、しかし複雑な問題〉とした上で、フランクフル『夜と霧』に掲げられた〈巻末写真〉を例に挙げ次のように述べている^①。

我々の心にはこれら収容所で虐殺された人、南の孤島で今日も屍を曝している死者たちの受けた傷、流した涙を何によって償ってよいか、わからないのである。戦争責任の問題はたんに政治的、社会的面で処理したらスムと思うのは間違いだ。もっと深いものを要求しているのだ。

遠藤は〈戦争責任〉は〈政治的、社会的面で処理した〉だけでは不十分であると主張している。遠藤は戦争によって亡くなった一人一人の〈受けた傷、流した涙〉に意識を向けているのである。遠藤の戦争に対

する関心は一時的なものではない。それは遠藤が戦争をキーワードとした作品を多く残したことに現れている。遠藤は戦中派の作家として、自らが負うべき〈戦争責任〉を模索していくのである。遠藤が戦中派を自負し、継続して戦争に関心を向けていたとすれば、作家遠藤を考えるとき遠藤が戦争を如何なるものとして捉えようとしていたのかを考察する必要がある。

右の評論から約一年後に発表された『海と毒薬』は九州帝国大学医学部で起こった米軍捕虜生体解剖事件（相川事件）をモチーフにしている^②。戦争に強い関心を持った遠藤が実際に起きた戦争犯罪を描いた作品であれば、『海と毒薬』は遠藤文学において重要な作品であると言える。作品の「文学界」昭和三一（一九五七）年六月号に「海と毒薬」、同年八月号に「裁かれる人々」、同年十月号に「夜のあけるまで」として発表された三作に加筆し、翌年四月に刊行された『海と毒薬』は、白井吉見が「日本のインテリの特質を追究して、かなりの成果を示した作品」^③とした他、当時の文壇から高い評価を得て第一二回毎日出版文化賞と第五回新潮社文学賞を受賞した。

第一章の前半部分には、第一章以降で生体解剖に参加する勝呂の数年

後の姿が語り手〈私〉によって語られる。第一章の後半部分から語り手が変わり、戦時中〈F市〉の大病院で勝呂をはじめ医者たちが田部夫人の死、おばはんの死を経て生体解剖に参加するまでの過程が第三者の語り手によって語られる。第二章では、上田ノブと戸田がそれぞれ自らの生体解剖参加までを語った手記が配される。第三章では再び第三者の語り手によって生体解剖の始終が語られている。

先行研究では生体解剖に参加した医者たちのうち、戸田を中心に論が進められてきた。佐伯彰一は作品の主題について次のように述べている。^①

『海と毒薬』の主題は、つまりは「罪と罰」という問題である。日本人にとって、罪と罰とは、何を意味するのか？ばくらの中には、世間と社会の罰をしか知らぬ「不気味な心」がひそんでいるのではなからうか？と。

戸田は作中で自らを〈不気味〉な心の持ち主と語った。その戸田の自己認識を佐伯は日本人全体の特性として、それが『海と毒薬』の問題提起であり主題であるとする。戸田の自己認識から展開した、日本人には罪意識が不在であるという見解は、その後の研究にも受け継がれている。他方、兼子盾夫のように〈主人公戸田が真摯に求めるのは悪行をはたらいた後の「ほんものの良心の疼き」、キリスト教的な「罪の意識」であった〉とし、戸田に罪の意識があることを論ずる研究もある。^②しかし、戸田に罪の意識があったか否かという問い自体が、作品論の根幹が日本人の罪意識の有無におかれていることを示している。磯貝英夫は〈多神教地帯をただちに精神的蛮土視する〉ことと遠藤を結びつけ〈かれのなか

に、単純西欧派の日本蔑視を感じて、あまり愉快ではなかった〉と述べている。^③戸田の自己認識を作品全体に拡大することによって、作品には磯貝のような反論が起きる。

これに対して戸田と同じく研究生であり、生体解剖に参加した勝呂については専らおばはんとの関係性を通して論じられるに留まる。勝呂のおばはんへの〈執着〉を〈その極限の状況にあって自己の存在が無意味化されることを拒絶するただ一つの「意図的行為」だった〉としたのは川島秀一の論である。先行研究では勝呂はおばはんに対する〈執着〉以外は無気力であり、無意志である人物であるとされてきた。武田友寿は一章の〈仕方がないからねえ〉という勝呂の発言を〈神なき精神風土にたいするこの作家の絶望にみちた戦慄〉を表したものであるとする。^④

これらの論は勝呂を、自らの〈不気味な心〉に對し意識的であり、それを明らかにするために生体解剖に参加したとする戸田と對極の存在として位置付けるものである。広石廉二は表題の「毒薬」は〈悪そのもの〉であり「断ろうと思えば断れた」呼び掛けに應じて生体解剖に参加してしまう、神なき日本人の精神風土を象徴している」と述べている。^⑤広石のように勝呂の生体解剖参加の理由を〈神なき〉ことと〈日本人〉であることとする論も見られる。論の中心が罪意識の有無にあることから、勝呂に関わる論についても先行の『海と毒薬』論は作品の要が戸田であるという点で一貫していると言える。戸田が焦点化される背景には「黄色い人」^⑥の千葉の存在があるだろう。千葉と戸田の共通点を見出し、遠藤文学における一つの系譜を明らかにしようというものである。

しかし、『海と毒薬』で主として焦点化されるのは戸田ではなく勝呂である。作品の冒頭と末尾で語られるのは勝呂であり、作品に描かれる田部夫人、おばはん、生体解剖という三つの死に関与する姿が語られる

のもまた勝呂だけである。これまでの研究では戸田に焦点を当てることによって、同時に田部夫人とおばはんの死と生体解剖とのつながりを軽んじてきたのである。戸田に焦点が当てられがちであった理由の一つに、戸田自身が生体解剖参加は自らの〈心の苛責〉を求めるためであると明らかにしていることがあるだろう。それに対し、勝呂は明言していない。勝呂が生体解剖へ参加した理由は勝呂の生体解剖参加までのプロセスを見ていく必要がある。本稿では、勝呂を作品の中心人物とした上で、勝呂にとって田部夫人の手術、おばはんの死は如何なる意味を持っていたのか、二人の死を経た勝呂の生体解剖参加への過程を明らかにしたい。

先に述べた通り『海と毒薬』は戦争犯罪として裁かれた生体解剖を描いた作品である。にも関わらず、先行研究では戦時下という部分は十分に論じられていと言えない。勝呂の生体解剖参加への道筋を論じる中で、作品中で戦争がどのような意味をもっているのかにも言及したい。

一、

勝呂が作中ではじめて患者の死に直面するのは、田部夫人の手術の場面である。田部夫人の手術は、勝呂の師であり勝呂からおやじと呼ばれる橋本教授が次期部長選挙で勝利するために当初の予定を早めて行われた。

〈大杉部長の親類〉である田部夫人の病を治療することで、おやじは大杉部長に連なる人間の票を集めようとしたのである。それゆえ、田部夫人の手術には夫人自身の治療という目的だけではなく、おやじの〈部長選挙〉のための〈点数稼ぎ〉という目的も含まれていた。田部夫人の手術に治療以外の目的があることについて、勝呂は抵抗を感じない。田

部夫人の身体は手術を行うのに〈ベスト・コンディション〉であったからである。手術が成功すれば、副次的におやじに利益があるうと、田部夫人の生命が救われたという事実は揺るがない。しかし、田部夫人の手術は失敗に終わり夫人は手術によって死んでしまう。その瞬間に立ち会った勝呂は〈膝の力が全く抜けてしまったようにしゃがみこんだ〉。助かるはずの患者が助からなかったことに衝撃を受けたのである。換言すれば、〈ベスト・コンディション〉であったにも関わらず成功しなかった田部夫人の手術は、患者の生命が医者の判断の外にあることを勝呂に知らしめる意味を持っていたと言えるだろう。

勝呂が見たのはそれだけではなかった。田部夫人の手術の後、勝呂は次のように考えている。

（今後どうしよう）と時々思うこともあった。（これが医者というもんじゃろうか。これが医学というもんじゃろうか）けれどもそうした事を考えるのも気だるかったし、考えてもわかりそうになかった。短期現役を明日にもひかえている現在、凡てはどうでもよいような気さえてくる。

勝呂の〈医者〉や〈医学〉への疑念は、田部夫人が手術失敗による死だけが起因ではない。勝呂が〈これが医者というもんじゃろうか〉と苦悩した〈これ〉とは、勝呂の〈これは一体なんだろう。これは一体なんだろう〉という呟きの〈これ〉と同じものである。田部夫人の死に対して勝呂は〈膝の力が全く抜けてしまったようにしゃがみこんだ〉ほどに衝撃を受けた。にも関わらず、勝呂以外の医者たちはその死を抵抗なく受け入れ、隠蔽した。田部夫人の死を知った柴田助教授も戸田も、田部

夫人の死を隠蔽するための医療行為に抵抗を感じない。戸田に至っては、それら術後の行為を「コメディ」とした上で「術後オペ中、患者が死ぬば、おやじの腕の全責任や。しかし、術後に死んだとすりゃあ、これは執刀医の罪やないからな。選挙運動の時にも弁解できるやないか」と分析している。勝呂は術後の医者たちの言動に対し「これは一体なんだろう。これは一体なんだろう」と、初めて疑いを持っている。つまり、勝呂の疑念は田部夫人の死を抵抗なく受け入れ、その死の隠蔽行為をしなければならぬことをすぐに了解した、勝呂以外の医者たちの言動を指している。勝呂はその場面を目撃したことによって、田部夫人の手術は患者を救うために存在するはずの医療行為が、患者の死を隠す目的で用いられた事実と直面した。同時に、田部夫人という患者の治療が主目的であり、おやじの「点数稼ぎ」は副次的な目的であったはずの手術は、田部夫人が死を迎え医者たちがそれを隠したことによって「点数稼ぎ」が副次的な目的ではなかったことを勝呂に知らせた。つまり、勝呂は田部夫人の手術に参加することによって、患者の生命が医者の判断の外にあることを知り、患者の生命を救うよりも医者の利益が優先される場面に立ち会ったのである。

二、

田部夫人の手術が「おやじの出世の手段」であったのに対し、勝呂の担当患者であるおばはんの手術は「柴田助教授の実験台」であった。おばはんの手術を行うことで柴田助教授は医者としての実績を一つ重ねることが出来る。田部夫人は手術が成功さえすれば身体を回復し得たのに対し、おばはんは手術前からその死が明白であった。おばはんの手術は

目的が「柴田助教授の実験台」に絞られている点で、手術の目的が治療と「おやじの出世の手段」にあった田部夫人とは異なっていると見える。柴田助教授が計画したおばはんの手術は、当初から治療が目的に含まれていないばかりか、おばはんは受ける必要のない「オペの苦痛」を与えるものであった。勝呂はおばはんは「オペの苦痛を与えること」に対し「不憫」に感じていた。勝呂がおばはんの手術に積極的になれないのに対し、むしろそれを肯定するのは戸田である。戸田はおばはんの死を「病院で殺された方が意味があるやないか」とした上で、その死の価値を主張する。

当然の話や。空襲で死んでも、おばはんはせいぜい那珂川に骨を投げこまれるだけやろ。だがオペで殺されるなら、ほんまに医学の生柱や。おばはんもやがては沢山の両肺空洞患者を救う路を拓くと思えばもって瞑すべしやないか

戸田にとって空襲による死は「せいぜい那珂川に骨を投げこまれるだけ」の価値のないものであった。それに対して手術による死は「医学の生柱」、つまり戸田を含む医者たちと未来の患者たちにとって価値があるものである。戸田はおばはんを医者たちと未来の患者たちが利益を得るための一種の道具として見ていた。そうした戸田に対し、勝呂はおばはんは単なる患者の一人としてではなく、特別に「執着」している。

彼は自分の気持をどう、戸田に説明していいのかわからなかった。
(俺、あの患者が俺の最初の患者やと思うとるのや)と言うのが恥ずかしかった。(俺、毎朝、大部屋であの髪の毛の黄色くなったおばはん

んの頭をみるのがタマらんのや。鶏の足みたいな手を見るの苦しゅうなるんや」と打明けるのが恥ずかしかった。そう言えば戸田はきつと皮肉な棘のある言葉をぶつけてくるだろう。そんな憐憫は今の世の中にとっても医者にとっても何の役にたたぬ所か、害のあるものだと言うだろう。

勝呂はおばはんを〈憐憫〉の対象として見ている。勝呂にとっておばはんは、大勢いる患者のうちの一人ではなく、代わりのいない固有性を持った存在となっていた。そうであるからこそ、勝呂はおばはんが苦しむ姿を見て自身も苦しんでいた。ところが、勝呂のおばはんに対する〈執着〉は、暴力という形でも現れてしまう。血沈検査に来ず、勝呂が与えた葡萄糖を大部屋で齧るおばはんを見て次のような反応を示す。

その卑屈な姿や黄色い乱れた髪をみると勝呂は言いようのない、あさましさを感じた。「なぜ来ん」

「へえー」おばはんは両手で口を押えたまま返事をしなかった。

「来いと言うところのに」

勝呂が思わず彼女の手を荒々しく引くと、おばはんは垢じみた布団の上に倒れた。その怯えた顔を彼は平手で撲った。

勝呂は自身の指示に従わないおばはんは暴力をふるう。その行為は一見、おばはんを抱いていたはずの〈憐憫〉の情とはかけ離れている。勝呂は何も知らずただ生き続けることを望むおばはんを、全てを知る自身の思う通りに動かすことによって、死は免れないにしてもせめて幸福へ導こうとしただけであった。しかし、その〈憐憫〉の情には一方で、自

身の指示に従わないおばはんを殴りつけてまで従えようとする意識が潜んでいる。勝呂の情は、おばはんの生命を支配しようとする側面さえ持ち合わせていたのである。〈憐憫〉には、それをかける者とかけられる者の二者間へ上下関係が挟み込まれてしまう。おばはんは〈憐憫〉を抱く勝呂の眼差しには、その対象との関係を固定化し支配という側面を持ちうる危うさを備えていたと言えるだろう。

勝呂がおばはんはに〈憐憫〉を抱いていたのに対し、柴田助教授はおばはんの手術で新しい手術の方法を実験したいと勝呂に話している。新しい手術方法が生かされるそれらの患者たちは当然、勝呂たちの眼前にはいない。勝呂が〈執着〉したおばはんとは異なり、固有性を持たない大勢の患者たちを指す。おばはんは手術前から助かる見込みがないことによって、手術の目的のうち患者の治療ははじめから失われ、〈柴田助教授の実験台〉という形で未来の患者たちを救うための治療法を探るという目的を備えていた。医者として重視すべきは自身が〈執着〉し〈憐憫〉さえ抱いている眼前のおばはんなのか。それとも、固有性を持たない未来の患者たちなのか。勝呂はそのどちらかを決めることが出来なかった。勝呂がそれを決定する前に、おばはんは自然死を迎えてしまう。勝呂は自らが〈執着〉したおばはんは一時の幸福を与えることも、未来の患者たちのために医学に貢献することもできなかったのである。同時に、おばはんの自然死は田部夫人の手術の場合と同様、患者の生命が医者の判断の外にあることを勝呂に知らせた。勝呂が医者として治療を行い患者を救うことは、田部夫人の場合にもおばはんの場合にもできなかったのである。

ここまで田部夫人の手術とおばはんの死が勝呂にとって如何なる意味を持っていたかを整理した。それでは、二人の死と生体解剖はどのように結びつき、勝呂は生体解剖参加へと到ったのだろうか。田部夫人の手術が決まってから勝呂は屋上にのぼって詩を口ずさむことが多くなるが、勝呂が医者として誰も救うことができないうちにおばはんが死んでからは、勝呂はついに無気力の状態に陥る。その無気力の内実は、二つ挙げられる。第一に、患者の生命よりも医者たちの利益が優先されていることである。勝呂は田部夫人の手術後、周囲の医者たちの行動に疑問を抱きながらも、そこで異論を呈することはできなかった。その上、おばはんの場合には自らが〈執着〉したおばはんも未来の患者たちも救うことができなかった。勝呂は自身の無力さを知ったことで〈俺一人ではどうにもならぬ〉と諦めさえ抱くのである。第二に、患者の生命が医者との判断の外にあることである。勝呂は田部夫人の手術失敗後の隠蔽行為を目撃することで、それまで疑うことのなかった〈医学〉への疑念を持つ。田部夫人とおばはんの死は勝呂にとって無気力の系譜となっている。

勝呂たちが参加した生体解剖の目的は、浅井助手曰く〈結核治療〉と〈戦争医学〉の問題を明らかにすることにあった。その目的だけを見ると、生体解剖とおばはんの手術の目的は非常に似ている。加えて言えば、生体解剖はおばはんの手術が行なわれなかったことによって解決できなかった問題が持ち込まれている。手術の目的に元々その対象を治療することは含まれていないという点でも、おばはんの手術と生体解剖は共通している。その手術の目的は柴田助教授の実績を上げることと、眼前に

いない未来の患者たちのために新たな治療法を明らかにすることにあった。おばはんの手術の目的と同じく、米軍捕虜の目的もまた医者たちの利欲と未来の患者たちを救うためであった。つまり、その目的だけに着目すれば、おばはんの手術と生体解剖は同じ価値を持つものであったと言える。もちろん、生体解剖とおばはんの手術は大きく異なっている。おばはんの手術は、おばはんの死がやがて訪れることは決定しているとはいえ名目上は手術によって殺すわけではない。おばはんの手術に対して生体解剖は、この行為によって医者が捕虜を直接殺すことが決まっていた。それにも関わらず、勝呂は生体解剖へ参加する。

先述の通り、勝呂は田部夫人とおばはんの死によって無気力の状態にあった。眼前の患者を救えなかった勝呂が医者としてできることは未来の患者を救うことしか残されていない。勝呂は眼前の患者を救うことができなかったために、未来の患者のためという目的が掲げられている生体解剖の参加に押し流されていったのである。おばはんの手術と同じく医学の発展という目的を持ったそれを否定できないとき、勝呂は生体解剖参加へと引きずりこまれて行かざるを得なかった。

それゆえ、生体解剖開始直後の勝呂は、〈自分が今、立ち会っているのは捕虜の生体を解剖している現実ではなく、本当の患者を手術するいつもの場面なのだ、そう思いこもうとした〉。それは勝呂が生体解剖を行う手術室でもなお、捕虜の姿を見ようとしないうちに表れている。勝呂は捕虜の〈ひくい呻き声〉を聞いても〈助かるばい。助かるばい〉と生体解剖を通常の手術だと思おうとした。しかし、手術室での田部夫人の姿を思いだしたとき、勝呂は捕虜が〈助かりやせん〉ことに気付く。

けれども、とじた勝呂の眼の裏に、あの田部夫人の手術の場面がふ

と甦ってきた。柘榴のように切り裂かれた夫人の死体を真中にかこんで、だれもが、かたい表情で壁に靠れていたあの手術の場面である。無影燈の光を反射させながら床に流れる水だけが、微かな音をたてていたあの手術の場面である。その死体をあたかも生きているように見せかけながら、病室まで運んでいった大場看護婦長。「手術は無事に終わりましたよ」暗くなった廊下の隅で作り笑いを唇にかべながら浅井助手が家族に言いよかせていた。

その場面は、医者本来の使命であるはずの患者の生命を救う可能性が断たれてもなお、その死を隠蔽するために医療行為が継続された場面である。その瞬間を思いだしたとき、勝呂は生体解剖が田部夫人の場合と同様であることを思い知らされたのである。生体解剖後、勝呂は生体解剖によって殺された捕虜の生前の姿を思い浮かべる。

階段をおりる自分の靴音を聞きながら彼は二時間前、あの米兵がなにも知らず、ここをのぼってきたのだなと思った。と、勝呂の眼にあの途方に暮れたような表情をした米国人捕虜の姿がはっきり浮んだ。

生体解剖の最中はその姿を見ないようにした捕虜の姿がへはつきり浮んだとき、捕虜は勝呂がへたった一つ死なすまいとした「おばはん」と変わらぬ一人の人間であったことを勝呂は知ったのである。おばはんの場合のように、眼前の対象を固有性を持つ一人の人間として見ようとすると勝呂の意識は生体解剖に参加してからも引き継がれていると言えるだろう。眼前の対象を大勢の人々の中の一人として見るとき、大勢の人々

のための死とすれば生体解剖は有用であるという側面を持つ。その場合に戸田が価値のある死としたおばはんの手術と生体解剖の違いは見出し難い。おばはんの手術と生体解剖を大きく分けるのは、固有性を持つ一人の人間として見る眼差しにあったのである。対象を一人の生として見たとき、固有性を無視した生体解剖は悪となる。戸田はおばはんを「うせ死ぬ患者」と言い表したが、そこで見失われていくのは、個人の生であり、顔である。勝呂は生体解剖後に捕虜の「表情」をへはつきり思いだすことで、手術と生体解剖が異なるものであることを知っただろう。

作品冒頭部は、語り手「私」によって生体解剖から数年後の勝呂の姿が語られる。ここで語られる勝呂は眼前の患者に「憐憫」を抱くわけでもなく、未来の患者のために医学の発展に貢献するわけでもない。「私」は勝呂が治療を行う姿を次のように語っている。

彼の指が私の脇腹の肋骨と肋骨の間を探っていた。針を突きさす場所を確かめているのだ。その感触には金属のようなヒヤリとした冷たさがあった。冷たさと言うよりは私を一人の患者ではなく、なにか実験の物体でも取扱っているような正確さ、非情さがあった。

勝呂は「私」を「一人の患者」ではなく「物体」のように扱う。生体解剖参加前、おばはんは「憐憫」を抱いていたときとは正反対の姿勢であると言えよう。勝呂は自身にとってかけがえのない存在となったおばはんを救えず、無気力状態で引きずられるように生体解剖へ参加した。しかし、生体解剖に参加してもなお勝呂には眼前で苦しむ患者から眼を背け、未来の患者たちを救うための医学の発展だけを求めることもでき

なかった。《私》によって語られる、生体解剖から数年後の勝呂はそのどちらかを選ぶことなく、ついに眼前の患者を《物体》として取扱い治療を行なう。それは勝呂が医学の無力さを理解した上で、それを受け入れ自らができることだけをしようにする姿勢である。勝呂は患者を一人の人間として《執着》するわけでもなく、未来の患者たちのために医学の発展に貢献するわけでもなく、ただ眼前の患者を患者大勢のうちの一人として治療することで医者として完成したと言えよう。言い換えれば勝呂は患者を《物体》として見てまでも、患者を救う医者であり続けようとしたのである。数年後の勝呂は《私》に対して次のように呟く。

仕方がないからねえ。あの時だってどうにも仕方がなかったのだが、これからだって自信がない。これから同じような境遇におかれたら僕はやはり、アレをやってしまうかもしれない……アレをねえ

勝呂によって語られる《同じような境遇》とは《みんなが死んでいく》戦時中に眼前で苦しむおぼはんではなく、固有性を持たない大勢の患者たちに意識を向けなければならない状況であると考えられよう。そのような状況下で、おぼはんという一人の患者を救うことができず、医学の発展という未来の患者たちのための目的が掲げられたとき、勝呂は生体解剖参加に引きずり込まれていかざるを得なかったのである。

おわりに

作品の舞台は第二次世界大戦中の日本である。その状況を戸田は《みんな死んでいく時代》¹⁾と言いつく。作品中、この呟きは戸田と勝呂によつ

て度々繰り返される。敵機による爆撃で街は破壊されていき《人々が死のうが、死ぬまいが、気にかける者もなくなった》。人々がみな死に対して鈍感になっていくこの状況下で、苦しむ一人一人に向けられる眼はない。戸田や勝呂の呟きですら、死者たちは《みんな》の一言で一括りにされ、その人間が持ちうる固有性は消滅していく。それぞれ眼前の対象に対して一人の人間という意識が働かなくなっていく点で、生体解剖と戦争は共通していると言えよう。石原吉郎は大量殺戮について次のように語る。²⁾

ジェノサイド（大量殺戮）という言葉は、私にはついに理解できない言葉である。ただ、この言葉のおそろしさだけは実感できる。ジェノサイドのおそろしさは、一時に大量の人間が殺戮されることにあるのではない。そのなかに、ひとりひとりの死がないということが、私にはおそろしいのだ。人間が被害においてついに自立できず、ただ集団であるにすぎないときは、その死においても自立することなく、集団のままであるだろう。死においてただ数であるとき、それは絶望そのものである。人は死において、ひとりひとりその名を呼ばなければならないものなのだ。

《みんな死んでいく時代》に戦争によって死んでいった者たちは、生者たちから死者という総体でしか捉えられず、それぞれにあったはずの固有性は失われていく。生体解剖によって殺された米軍捕虜も、最後まで名が明かされることはなかった。自らが《執着》したおぼはんを救おうとした勝呂でさえ、おぼはんをその名で呼ぶことはない。個を持たない対象に眼を向けたとき、生体解剖の参加は勝呂の発言通り《仕方がな

いからねえ。」と言わざるを得ない。しかし、その瞬間に固有性は見失われ、その苦しみもなかったものとして扱われる危険があると言える。

作品が描いたのはそれだけではない。眼前で苦しむおばはんはんに「執着し『憐憫』を抱いた勝呂の意識は、おばはんとの間に上下関係を生み支配という側面を持ちうる危うさを備えていた。勝呂の視線には、生体解剖に参加した他の医者たちの場合とは異なる危険性がある。

作品が発表されたのは昭和三二年である。日本は高度経済成長の最中で、世間の人々は社会の発展だけを見据えていた。その時、戦争で苦しみ死んでいった人間に関心が向くことはなかっただろう。終戦から約一〇年後、読者の意識が未来にのみ向いているその時に、個を見失っていたゆえに生体解剖へ参加した人々の姿を示したことに本作品の意義があると言えるだろう。

勝呂は生体解剖参加を引き受けた夜、次のように考える。

どうでもいい。俺が解剖を引きうけたのはあの青白い炭火のためかもしれない。戸田の煙草のためかもしれない、あれでもそれでも、どうでもいいことだ。考えぬこと。眠ること。考えても仕方のないこと。俺一人ではどうにもならぬ世の中なのだ。

勝呂は医局の中の自身の状況と戦時下という状況を「俺一人ではどうにもならぬ世の中」と重ね合わせている。医者が医学の発展という目的を掲げたとしても、生体解剖は犯罪である。しかし、それが唯一合理化されるのは人々が固有性を失う戦時下である。勝呂にとっては生体解剖も戦争も、それらが合理化された瞬間に自らの力では「どうにもならぬ」ものとなってしまふ。本作品では戦争もまた、生体解剖と同様に多くの

危険を孕みながら、個人の力では「どうにもならぬ」ものとして描かれているのである。遠藤は作品の中に戦争を個人の力では抗えないものとして描いた一方で、戦争によって死を迎えた人々に対する視線を描くことも忘れなかった。この視線は本稿冒頭で引用した遠藤の言説とも結びついている。遠藤の個に向けられた意識は遠藤文学の根幹を成すものであると言えないだろうか。

注

- (1) 遠藤周作「戦争責任の問題」(『産経新聞』夕刊、昭和三一・九・二二、産経新聞社)
- (2) 作品と相川事件との関連については既に多くの論者によって論じられてきた。相川事件とその後の裁判については大田正紀が「遠藤周作『海と毒薬』論(1)―モチーフとしての生体解剖事件と罪責論」(『梅花短大国語国文』一〇号、平成八・一〇、梅花短期大学国語国文学会)で詳細を述べている。
- (3) 白井吉見「文芸時評」(『朝日新聞』朝刊、昭和三一・九・二五、朝日新聞社)
- (4) 佐伯彰一「解説」(遠藤周作『海と毒薬』、昭和三五・七、新潮社)
- (5) 兼子盾夫「遠藤文学における象徴と暗喩の色彩論Ⅱ―『海と毒薬』の場合」海の「碧」対「黒」、「白」い人の罪意識対「黄色」い人の罪意識―(『横浜女子短期大学研究紀要』二二号、平成一九・一、横浜女子短期大学)
- (6) 磯貝英夫「戦後文学史のなかの遠藤・北」(『国文学』解釈と教材の研究)一八号、昭和四八・二、學燈社)
- (7) 川島秀一「遠藤周作ノート(二)―『海と毒薬』について―」(『山梨英和短期大学紀要』二二号、昭和六三・一、山梨英和大学)
- (8) 武田友寿「運命の連帯感『海と毒薬』の作中人物」(武田友寿『遠藤周作の文学』、昭和五〇・九、聖文舎)
- (9) 広石廉二「海と毒薬―神なき人間の悲慘」(広石廉二『遠藤周作のすべて』、平成三・四、朝文社)

- (10) 遠藤周作「黄色い人」(初出「群像」一二月号(昭和三〇・一一、講談社)、
初刊『白い人・黄色い人』(昭和三〇・一二、講談社))
- (11) 石原吉郎「確認されない死のなかで―強制収容所における一人の死」(石
原吉郎『望郷と海』、昭和四七・一二、筑摩書房)
- (12) 戸田、上田ノブをはじめ勝呂以外の登場人物に関しても議論の余地がある。
他登場人物については本稿の統編にて論じたい。

附記 本稿における『海と毒薬』本文引用は、全て『遠藤周作文学全集』第一巻
(平成一一・四、新潮社)に拠る。